

ユニット3（東アジア地域班）研究会

2013年度 第1回 ユニット3（東アジア地域班）研究会

- 報告題目：求仙与成仏—晚明的文人結社与宗教—
- 開催日時：2013年7月1日（月）16:45～18:15
- 場所：龍谷大学大宮学舎清風館地下1階 B103 教室
- 報告者：賀 晏然（シンガポール大学大学院博士研究員）
- コメンテーター：木田知生（龍谷大学文学部教授，BARC 副センター長）
- 参加者：12人

【報告のポイント】

曇陽子・葉小鸞は晩明の代表的な女性詩人である。彼女らはともに仏教を信仰し、死後は昇仙したとされる点で共通しており、清代の女性詩人である汪端は、彼女らの活動を評価し、また明代の詩を整理して『明三十家詩選』を作成し、その中には仏教・道教的要素を取り入れている。賀晏然氏は、彼女らの宗教活動と著作、彼女らを取り巻く人的関係を整理し、明の万暦時代以降、江南の文人を中心に士人層の宗教活動について考察を加えた。

【報告の概要】

賀晏然氏は、報告の導入として清代の女性詩人である汪端（1793～1839）の「葉瓊章自写双美图」（『自然好学齋集』巻8）という詩を取り上げた。この詩の最後の句に見える「曇陽」とは曇陽子（1558～1580）のことを指す。彼女は文淵閣大学士の王錫爵の娘の王燾貞であり、様々な不思議な逸話を持つ人物である。17歳の時、徐君という者が浙江からきて彼女との婚姻を望んだが、彼女は信仰に身を捧げることを決めて、それ以後は仏教徒として暮らした。沈徳符『万曆野獲編』巻23によると、曇陽子が亡くなった後、王錫爵の友人である王世貞と彼の家族は、曇陽子の名前を冠した寺院である「曇陽観」に入って修行生活を始めたという。当時、江南地域では曇陽子は昇仙した後、神になったと信じられていた。

晩明の著名な女性詩人である葉小鸞（1616～1632・字は瓊章）は、晩明の名士であった葉紹袁の三女で、17才で夭折したとされる才女である。死後、彼女の優れた詩文は葉紹袁によって『返生香』という詩集にまとめられ、その事績については葉紹袁の編した『午夢堂集』に詳しい。そこでは、葉小鸞は仙女「寒簧」となって月に行き、現在は仙人の住处である「緱山仙府」にいるとされる。また葉紹袁の夢の中で、葉小鸞は「もし貴方が善人となり、極楽へ行きたいのならば仏教を信仰するべきです」と言ったという。葉小鸞は、若くして亡くなり、仏教を信仰し、後に昇仙したとされる点で曇陽子と共通している。

「葉瓊章自写双美图」の作者である汪端も、仏教徒として有名な人物である。彼女は明代の詩を整理して『明三十家詩選』を作成し、この中には仏教徒の作った詩も含まれてい

る。後に、彼女の舅である陳文述が編纂した『西冷閨詠』によると、この本が完成した際に、仙女百数人より花を贈られる夢を見たという逸話がある。

次に、賀晏然氏は曇陽子・葉小鸞・汪端を取り巻く人々の関係とその宗教活動について解説した。曇陽子は、彼女の父親である王錫爵とその友人の王世貞を中心に、屠隆・劉惟炳・孫承南・虞淳熙・范守己・李時珍など、曇陽子の出身地である江蘇省太倉地域など江南地域の人士と関係があった。葉小鸞は夭逝したため、彼女自身を取り巻く人間関係ははっきりしないものの、彼女の父親である葉紹袁と関係の深い錢謙益・金聖歎などについて賀晏然氏は整理を行った。更に汪端については、舅である陳文述などとの関係について述べた。このような人的関係や彼女らの信仰生活・著作からは、仏教・道教などの信仰活動を通して、女性が自我を構築しようとする動きが確認できると賀晏然氏は述べた。

以上、本報告は明清時代の女性の信仰活動や著作、更には彼女らを取り巻く人間関係を通して、当時の士人層の思想的営みを明らかにするものであった。

【議論の概要】

木田知生氏は以下の三点の質問を行った。一点目は、曇陽子・葉小鸞の生きた時代と汪端が生きた時代には約 150 年の隔たりがあるが、その間に曇陽子・葉小鸞に対する評価に変化はあったのかという点である。二点目は、本報告は江南地域の文人が中心であったが、同地域の特定の寺廟・僧尼や宗派と関係を持つことがあったのかという点である。三点目は、本報告の中で、江南地域の中でも具体的に「太倉」という地名が登場したが、江南地域の中でも特定の地域を設定して考えた方がよいのではないのかという点である。

賀晏然氏は一点目について、明の滅亡による資料の拡散や散逸などを考慮する必要があると答えた。それまで彼女らのいずれかについて言及した人物はいたかもしれないが、二人をまとめて取り上げたのは汪端が初めてであったといえる。二点目については、浄土教などに関する記載が確認でき、葉小鸞については禅宗に近い家柄であったと確認できるものの、個別的な宗派・寺院と関わりがあるとは指摘しにくいと答えた。どこかの寺院に出かけたり、僧と書信のやりとりがあったことは認められるが、具体的な宗派との関わりがあったか分からず、個別的な事例に止まる。三点目については、江南とは長江南部地域全域を指すことが多いが、本報告において特に「太倉」を取りあげたのは、曇陽子の残した寺院が存在し、葉小鸞・汪端とも深い関わりがある地域だからであると答えた。また、葉小鸞は蘇州地域等とも関係があり、ケースバイケースではあるが彼女らの事績については江蘇南部地域が主たる研究対象となると賀晏然氏は述べた。

佐藤智水氏は、曇陽子・葉小鸞を「道」と「仏」とを行き来するような人物として理解されるようになったのは、汪端の時代からと理解して良いのかという質問がなされた。また、葉小鸞については彼女自身の詩を紹介してもらえると、彼女自身がどういうことを考えていたか理解しやすかっただろうと述べた。

賀晏然氏は、汪端は必ずしも二人の宗教面を強調しているわけではなく、彼女らの活動



自体について評価をしたといえる
と述べた。葉小鸞の詩の中には、七夕に
月宮を夢見たり、嫦娥を描写した詩が
ある。曇陽子は直接書いたものが残っ
ていないが、葉小鸞は彼女自身が書い
た詩があるので、そこから判断できる
ものの、宗教に関して明晰に論及した
ものは少なく、他の明清の才女と比較
すると宗教的な情景描写はそれほど

多くはない。それは、彼女の父親が宗教的な面を覆い隠したという可能性も指摘されてい
る。この時代、儒仏道三教については色々な考え方があるが 個別的・具体的に考えてみ
ないと結論を導き出しにくいと賀晏然氏は述べた。



2013年度 第2回 ユニット3（東アジア地域班）研究会

- 報告題目：近代における南都仏教のあゆみ
- 開催日時：2013年7月18日（木）9:00～10:30
- 場所：龍谷大学大宮学舎東翼 205 教室
- 報告者：中本由美（2012年度 BARC 公募研究員，龍谷大学研究生）
- ファシリテーター：中川 修（龍谷大学文学部教授）
- コメンテーター：中西直樹（龍谷大学文学部教授）
- 参加者：57人

【報告のポイント】

日本における近代仏教史研究は、村上专精・鷲尾順敬・境野黄洋らによって明治27年(1894)に創刊された『仏教史林』にはじまる。村上はその創刊号に寄せた「仏教史研究の必要を述べて発刊の由来となし、併せて本誌の主義目的を表白す」のなかで、「一に仏教史は日本の国史に至大の関係あるか故に国家を思ふ忠義心に指導せらるゝと…（略）」と、自らの立場を表明しており、近代仏教史研究の当初の立場がうかがえる。また、村上・鷲尾・境野がそれぞれ浄土真宗大谷派の僧籍をもっていたように、仏教史研究の当初の担い手は仏教系知識人（帝大や宗門系大学で高等教育を受けた青年知識人で中心は真宗の在家信者）であった。

中本由美氏は、こうしたなかにあって南都仏教研究がどのように展開し、そこでは南都仏教がどのように語られているのかという点について、当時の学問潮流に留意しながら、明治から昭和戦中期までの南都仏教研究について報告を行った。

【報告の概要】

明治という時代は、南都仏教界にとってはまさに激動期であり、廃仏毀釈・上知令・宗派独立問題などによって南都諸寺は著しく荒廃した。こうした状況のなかで、多くの文化財や貴重な古文書類も散逸したが、これを憂慮した政府は明治4年（1871）より古社寺と宝物の保護政策を推進、その過程で南都諸寺の研究が進められていく。まず注目されたのは明治20年代に提起された法隆寺の再建・非再建に関わる問題であり、美術史・建築史の分野から南都仏教に関する研究がはじめられていった。また、奈良時代の僧侶に関する研究（『仏教史林』に掲載）の他、日本仏教通史や奈良時代通史のなかで南都仏教に言及する研究もあり、そこで執筆者の南都仏教観が提示された。例えば、大屋徳城『蓮如上人』（内外出版協会 明治43／1910年）は、南都仏教を「國教」であり「治國平天下の良法」とであると述べる一方、鎌倉時代には「舊佛教」たる南都仏教及び天台・真言宗は「宗教としての勢力は殆ど無く」としたと指摘する。大屋の指摘に見られるように、この時期には鎌倉「新仏教」を日本の仏教の到達点と見る鎌倉新仏教中心史観（「鎌倉新仏教論」）がすでに形成されつつあり、以後の南都仏教研究に大きな影響を及ぼしていく。また留意すべきは、上記の研究はいずれも南都諸寺外部の研究者によるものということである。管見の限り、仏教史研究における南都仏教界内部からの自発的な研究は明治期には見出せないと言本氏は述べた。

大正期になると文化史研究の隆盛に国粹主義的な傾向が相俟って、日本文化の故地として奈良に注目が集まるようになると同時に、その文化を育んだのが仏教であり、日本文化の根底にあるものとして南都仏教が把握されるようになる。さらに、和辻哲郎の『古寺巡礼』が出版されると、そこで紹介される仏教美術は人々を魅了し、にわかに南都諸寺への来訪を誘った。このように文化財を中心とする南都諸寺への関心は地元・奈良の知識人を刺激し、奈良の文化を研究する諸団体の設立と機関誌の創刊が相次ぐ。それらのなかでも特に注目されるのが、東大寺・薬師寺など南都諸寺の有志によって創刊された『寧楽』である。仏教美術に関する研究を主に扱う本誌は、南都仏教界内部からの自発的な研究の淵源として重要である。それが仏教美術の研究誌であることは、南都諸寺がその復興の中核に宝物類を置いていたことをよくあらわしている。また、この時期は先に提出された鎌倉新仏教中心史観が研究者の間に浸透し、「鎌倉新仏教」の革新性・優位性を論じる研究が積み重ねられていく一方で、「旧仏教」は「新仏教」成立の前提にすぎないと、「新仏教」が克服しようとした「旧仏教」に対する評価を相対的に低下させていった。こうして仏教史研究における南都仏教の位置が決定的になっていったのである。

帝国主義に邁進した昭和の日本では日本固有の精神・文化がより強調されるようになる。それは仏教も同様で、中国・朝鮮半島から日本にもたらされた仏教は単なる中国仏教の移植ではなく、独自の展開を遂げた「日本仏教」という見方が唱えられる。昭和12年（1937）刊行の文部省『国体の本義』では、聖徳太子から鎌倉仏教にいたる「日本仏教」の発展を

親鸞と道元を頂点として描き、「日本仏教」の本質と日本固有の精神文化を体現する存在と位置付けた。戦時下において仏教は聖徳太子以来の「神国日本」の精神を体現し、その目的実現のために「国民精神」を鼓舞すべき役割を担うものとされたのである。こうしたなか、にわかに南都仏教にも注目が集まり、「鎮護国家」「国家仏教」としての歴史が強調されるようになっていった。また、この時期の特徴として特に注目されるのが、南都仏教内部からその史的展開にまつわる研究が発信されたことである。橋本凝胤は薬師寺の僧で、東京帝国大学印度哲学科卒の仏教学者であるが、昭和9年(1934)の岩波講座『日本歴史』に「南都佛教」と題した南都仏教史の論考を寄せている。管見の限り、南都仏教界内部からの南都仏教史像の提示はこれが最初であると中本氏は指摘した。

最後に、中本氏は本報告について以下のようにまとめを行った。明治期から昭和戦中期における南都仏教研究を概観してみると、多くの研究者の南都仏教観は「鎌倉新仏教論」と「国家仏教」に大きく規定されているようである。「鎌倉新仏教論」によって、隆盛【奈良時代】→衰退【平安時代】→復興【鎌倉時代】という南都仏教の展開が構築されていくと同時に、「国家仏教」という見方によって南都仏教観は固定化されてしまった。しかし近年、学界では日本仏教史の全体像の再検討が叫ばれ、「鎌倉新仏教論」のみならず「顕密体制論」によって固定化された仏教史像を打破して、既存の枠組みに縛られずに日本仏教史の全体像を解明しようとする動きが活発化し、すでにいくつかの成果が出はじめている。こうしたなかにあつていかに南都仏教を描き直すか。日本仏教史の全体像の把握のためには、南都仏教研究の進展が不可欠であると中本氏は指摘した。

【議論の概要】

中西直樹氏は、近代以降の日本仏教史研究は、宗門人がその源流を辿るというコンセプトがあつたと述べた。浄土真宗の場合、日本仏教は親鸞・法然など鎌倉新仏教を到達点として予定調和的に発展したと考えるため、それ以前の仏教に関して見えてこない部分があるのは確かである。ただしそう考えるならば、「南都仏教」という概念はどういう地域性・時代性を持つのか、そもそも「南都仏教」という概念規定自体が正しいのかという疑問が生まれる。これは、東大寺など明治時代に寺領を多く取り上げられ寺勢が弱まった寺院が、復権のために考え出した概念であるというイメージを持たざるを得ない。その時代の仏教を正しく理解するために「南都仏教」という概念は有効なのか、改めて検討する必要があると中西氏は述べた。

中本氏は、南都北嶺と言われるように、史料上、北嶺は延暦寺、南都は興福寺を指す言葉であると述べた。先行研究においては、明治期に村上専精氏が「南都仏教」という言葉を使用しており、大正期になると大屋徳城氏などが北嶺(天台)に対して南都という語を使用している例もある。ただし、「南都仏教」という歴史用語が持つ意味に関しては、なお検討の余地があると中本氏は述べた。

佐藤智水氏は、日本仏教は通観的に、釈迦とその教えに関する理解を曖昧なまま進めて

きた印象があり、戦後、中村元氏などの原始仏教研究などによってそれが改善され、日本仏教の見直しを促したと指摘した。また佐藤氏は、南都仏教がこれからの時代に即応するためには、原始仏教・中国仏教と自分たちの教学との関連性を歴史的・教学的に追求する機関が必要だが、南都仏教寺院にはそのような研究・教学機関を有しているのかという質問を行った。中本氏は、1893年に教学研鑽の場として法隆寺勧学院が、1896年には廃仏毀釈で散逸した古文書・歴史書などの収集・保管のため東大寺内に南都仏教図書館が開設されたが、具体的な活動は見えてこないため、南都仏教寺院の教学研究機関に関しては今後の検討課題であると答えた。

フロアからは、『寧楽』が創刊された1920年代、奈良では全国水平社が結成されて奈良仏教に対する見直しが行われているが、その一方で、旧仏教側からの活動が確認できるという点をどのように考えればよいのかという質問がなされた。中本氏は、この時期の南都仏教側の動きとして、それまでは内部的な活動に止まっていたものが、外部へと発信された点が重要であると指摘した上で、水平社の活動との関わりについては今後の課題としたいと述べた。



2013年度 第3回 ユニット3（東アジア地域班）研究会

- 報告題目：日本天台における一乗思想の系譜―最澄から源信へ―
- 開催日時：2013年12月4日（水）10:45～12:15
- 場所：龍谷大学大宮学舎東翼205教室
- 報告者：浅田正博（龍谷大学文学部教授）
- ファシリテーター：佐藤智水（龍谷大学客員教授）
- コメンテーター：道元徹心（龍谷大学理工学部准教授）
- 参加者：142人

【報告のポイント】

日本仏教に大きな足跡を残した伝教大師最澄（767-822）と恵心僧都源信（942-1017）を中心に、日本天台における一乗思想の系譜が示された。また、源信の「凡夫」の定義に関する考察が深められ、源信が彼自身をどのような人間として位置づけていたのかがテキストを通じて明らかにされた。

【報告の概要】

まず最澄の一乗思想が、彼と同時代人の徳一（-814-）との論争を通じて紹介された。最澄は、いかなる者も一つの乗りものに乗ることが可能であり、究極的な悟りに至ることができるという一乗思想の立場をとるのに対して、徳一は、悟りを得て仏になることができる者とできない者とが本来的に存在するという三乗思想を主張した。それぞれの天台教学と法相教学とを背景とした「一三権実論争」は、一乗説が真実か、あるいは三乗説が真実かを決しようとする、釈迦の真意を探究する議論の応酬であった。最澄が「一乗が真実である」と主張する根拠となった『法華経』について徳一は、「釈尊が人々の思いに従って説いた経であり、真実ではない」などの主張をなし、『法華経』はつまるところ狭い教えであるとした。それに対して最澄は、「悟りの可能性が無い者を立てる三乗説が真実であるはずがない」といった根拠を挙げ、一乗を説く『法華経』を擁護した。論争はさまざまな観点からなされたが、決着を見ないまま両者とも没することとなった。

最澄の没後しばらくして、源信は一三権実論争の終結を期し、『一乗要決』を記した。その書物にはインド・中国・日本でなされてきた、仏に成る可能性に関する論争の経緯が記されており、全ての者に仏と成る可能性を見いだす流派（悉有仏性宗）と、一部の者にその可能性を認めない流派（一分無性宗）があったことが示されている。また、報告者が大部分を発見し学界に紹介した『一乗仏性究竟論』を記した法宝から最澄への一乗思想の系譜もまた、『一乗要決』に見られることが指摘された。また、仏と成る可能性を論じる上で重要視される「真如所縁縁種子」が、「真如種子」として『瑜伽論』に出てくることを源信が見いだし、一乗説の補強をしたことも紹介された。

次に、源信の一乗思想の実践が、彼の『往生要集』を通じて考察された。『往生要集』を一乗思想の実践書として位置づける試みは、これまでの学界には見られない報告者独自の視点として提示された。源信は『往生要集』の序文の中で自身を「頑魯之者」とし、優れた能力を持つ「利智精進之人」と対置したことが確認され、さらに、源信がどのような意味で「凡夫」という語を用いたのかが検討された。源信にとって「凡夫」とは身命をかけ修行を求める「行者」であり、今日で理解されているような「どのような修行もままならない煩惱具足の凡夫」というイメージからは遠い。つまり、源信にとって「凡夫」とは「利智精進之人」であり、「頑魯之者」ではないということになる。ではその「頑魯之者」が往生可能であるか否かについては、源信は可能であるという立場をとり、それには「称念」することが必要であるとの見解を示している。つまり源信は『往生要集』において、能力の劣る者が往生し、仏と成るためのプロセスを示すことによって、一乗思想の実践を示したのである。あるいは、「頑魯之者」たる源信自身が成仏するための実践書として『往生要集』が記されたと言えよう。

【議論の概要】

道元氏からは、『法華經』を最高の經典と位置づける源信が、なぜ『往生要集』においては浄土思想を基盤として一乗の実践を主張したのか、という質問がなされた。それについて報告者からは、『法華經』には厳しい修行が示されており、この世で仏と成ることが難しい「頑魯之者」や「具縛造悪人」が救われる実践は具体的に説かれていないからであるとの回答がなされ、源信は、彼自身を含めた能力の劣る者たちが浄土に往生し、そこで悟りを得るという実践を『往生要集』で示したという見解が提示された。



2013年度 第4回 ユニット3（東アジア地域班）研究会

- 報告題目：調査報告—河内・大和における行基関係史跡を訪ねて—
- 開催日時：2013年12月13日（金）18:25～19:55
- 場所：龍谷大学大宮学舎北翼101教室
- 報告者：中川 修（龍谷大学文学部教授）
- コメンテーター：中本由美（2012年度 BARC 公募研究員）
- 参加者：23人

【報告のポイント】

本報告は、2013年8月6日～8日に実施された、中川修氏による奈良県・大阪府に現存する行基関連史跡に関する調査報告である。実見によって得られた成果を元に、中川氏は行基関連史跡の所在地などから、行基の活動と地域社会の関係について検討を加えた。

【報告の概要】

本報告は、実際の写真を提示しながら、中川修氏および調査に同行した大学院生などによって共同報告・討議という形で行われた。まず、中川氏が調査の概要と目的について説明を行った。本調査の目的は、中河内に点在する渡来系豪族ゆかりの寺院を訪ねること、街道沿いに建立されている行基関係寺院をめぐること、行基と関係が深い土師氏関連の地域をめぐること、行基が泉大橋を架けたとされる泉橋院を訪問することの四点である。

調査の結果、以下のような課題が見えてきたと中川氏は述べた。まず、中河内の古市地域や河内知識寺に行基との関連が見られない点である。古市地域は土師氏の本貫地であり、渡来系豪族が多く居住する地域である。道明寺（土師氏）、葛井寺（葛井氏）、野中寺（船

氏)、西琳寺(西文氏)など渡来系氏族ゆかりの寺院が存在するものの、行基の活動自体は確認できない。聖武天皇が東大寺大仏建立の契機となったとされる知識寺(知識大仏)のある地域においても行基の活動は確認できない。

また、710年～720年頃に行基の伝道活動は、難波と平城京を結ぶ暗越奈良街道沿いに展開を見せる点に関して、井上薫氏は行基の作った布施屋について「貢調運搬夫の救済施設」と指摘している。奈良街道は難波と平城京を結び、また途中の暗峠は非常に厳しい道である。この街道沿いに点在する行基関係寺院もまた、貢調などの運脚夫に対する救済施設としての機能を有していた可能性がある。

更に、行基の平城京進出は土師氏による影響があるのかという点も問題となる。行基の活動を概観してみると、常に土師氏と関わりがあり、行基が平城京で活動できた背景には土師氏との関係が影響していると推測できる。土師氏は古墳造成技術を持つ氏族であり、そうした建造技術と行基の関係についても更に検討する必要がある。

最後に、泉橋院・泉大橋と行基の伝道活動の関係について、現在の泉橋院の解説によると、この寺院は「行基が作った泉大橋を守護・管理するために作られた」という。これは、行基による寺院建立の目的が救済以外に、橋や池、布施屋を作った際にそれを維持・管理することであった可能性を示唆し、行基寺院の建立目的を再度確認させられる。また泉橋院単体で見るのではなく、同時期に作られた恭仁京との関係、あるいは行基・聖武天皇・橋諸兄の三者関係を考慮した上で、泉橋寺のことを考えなければならない。

以上、本報告は、現地調査によって得られた成果から、行基の活動と地域社会、特に渡来系氏族との関係を述べるものであり、仏教と地域社会の関係を考察するための一助となるものであった。

【議論の概要】

中本由美氏は、一般的に、古代の河内地域は行基以前から民間の仏教信仰が盛んだったとされると述べた。特に古市・志幾・丹比などの地域は、王仁と関係する西文氏・津氏・葛氏・船氏などの氏族が居住した地域とされる。これらの渡来系氏族は、常に大陸や半島との交渉を持ち、先進的な仏教文化などをいち早く受容している。また、同地域は民間の知識結による造像や写経もいち早く見られたところである。

行基の活動地域も渡来系氏族と関わり深い場所が多いが、中河内には行基関連施設が確認できない。その理由として、行基に先行して、行基同様に利他行に励む教化僧や民間仏教のグループが存在し、そのグループと行基集団に競合・対立関係があったことが想定されるという意見がある。このような点を考慮しながら、行基の活動を考察する必要があると中本氏は指摘した。

また、行基集団の内実について、通説的な見解では行基自身、行基の弟子、行基に従う豪族・有力農民、班田農民で構成されていると理解されている。一方、菅原寺(喜光院)の建立と前後して、行基の活動は平城京から河内・摂津・和泉・山城に移っていく。菅原

寺建立は行基の活動の転機となったと指摘されることがあるが、行基集団の内実にも変化が見られ、河内・摂津・和泉を本拠に持つ渡来系氏族が多い下級官僚層が加わっていった。

こうした点を考慮すると、行基の活動が本拠である和泉から、河内・摂津・山城と順を追って拡大していったのではなく、行基のもとに集まっていた人々が、弾圧後に本拠地へ強制送還され、その過程で点的に活動の場が広がった可能性がある。更に、行基による交通施設の整備などの社会事業や伝道活動が街道沿いに展開していることも考慮すべきであろうと中本氏は述べた。

平林章仁氏は、行基と土師氏との関係を想定することは興味深いと述べた。律令以前の日本において、様々な技術集団を総括して、天皇に関わる葬祭儀礼の一切を取り仕切ったのが土師氏である。やがて大規模な古墳が作られないようになると、土師氏の下にある技術集団も解体されたと考えられる。行基がそれをもう一度束ねて、自身の活動に生かしていったと考えることは可能であると平林氏は述べた。また、王仁後裔氏族、渡来系有力氏族は野中・古市に集住している。彼らは自由意志でそこに住んだのではなく、王権の意志でそこに住み、それぞれの役割を担っていた。行基が王権に関連する特別な地域を避けて活動していたというのも、歴史的な状況として十分に理解できると平林氏は述べた。

フロアからは、行基の仏教信仰についての質問があった。中川氏は、行基は瑜伽唯識を学んだとされているが、その中の瑜伽戒は大乗戒であり、苦しむ人がいれば助けに行き、その結果として権力を批判することになっても良いとされるという指摘があると述べた。しかし、戒は行動のあり方を規制するものではあるが、行動そのものではない。こうした点も考慮し、唯識をどう読むかという点についても考える必要があると中川氏は指摘した。



2013年度 第5回 ユニット3（東アジア地域班）研究会

- 報告題目： 20 世紀初頭の内陸アジア調査活動研究の新たな視点
—スヴェン・ヘディンと大谷光瑞と清政府の官僚たち（那桐，張蔭棠）の国際政治社会—
- 開催日時： 2013 年 12 月 19 日（木） 9:00～10:30
- 場所： 龍谷大学大宮学舎東翼 205 教室
- 報告者： 白須淨眞（広島大学教育学部准教授）

- ファシリテーター：中川 修（龍谷大学文学部教授）
- コメンテーター：村岡 倫（龍谷大学文学部教授）
- 参加者：55人

【報告のポイント】

20世紀初頭、イギリス・ロシア、あるいはイギリス・清の間で調印された条約により、チベットは緩衝地域とされ、学術調査などの目的であっても外国人が入ることは許可されなかった。1906年、イギリスの制止を振り切ってチベットに入ったスヴェン・ヘディンに対して、大谷光瑞は彼のために対清交渉を行っている。白須淨眞氏は、当時の国際政治社会情勢と相関させて、ヘディンや光瑞の活動を捉えなおした。

【報告の概要】

報告の導入として、白須氏は大谷探検隊が活動した20世紀初頭の国際情勢について解説した。日露戦争中、イギリスはチベットを軍事的に制圧し、1904年に清とラサ条約を締結したが、英清の利害調整のため、1906年に改めて「西藏に関する（英清）条約」が調印された。その後、ドイツの台頭によってイギリス・ロシアが協調関係に移ると、チベットは緩衝地域となった。1907年、英露協商に際して交わされた交換公文には、調印後三年間、学術上の派遣員がチベットに入ることを許可しないという一文がある。これは、イギリスの制止を振り切ってチベットに入ったヘディンの存在が念頭にあると白須氏は指摘した。

チベットのシガツェにいたヘディンは1907年、欽差全権大臣の張蔭棠より退去を命じられた際、「外国のいかなる代表者もしくは代理人もチベット入国の許可を得ることができない」という1904年の条約、「大英帝国はチベット領土のいかなる部分も併合しないこと、及びチベットの内政に干渉しないことを義務とする」という1906年の条約を突きつけられた。その文書は、当時の清国の公文書の書式でも文体ではなく、国際的な外交文書の様式を取得したもので、元々英文であったと推察できる。1905年の科举廃止以降、厳しい国際政治社会の矢面に立つ清国外務部では帰国留学生を含む外交人材の登用が一挙に進展し、張蔭棠のような外交官が育っていた。

窮地に立たされたヘディンのために、対清交渉を行ったのが大谷光瑞である。光瑞がヘディンに送った書簡や、『鏡如上人年譜』、『那桐日記』、『清実録』などによると、光瑞は在北京日本公使館一等書記官の阿部守太郎とともに、1907年4月13日に清国外務部の那桐と交渉している。光瑞と阿部は、ヘディンの探検があくまで「学術上の探検である」ということを強調したが、那桐は受け入れなかった。那桐はチベット大臣・英国公使からの報告によって、すでにヘディンがチベットに入っていることを知っており、ラサ駐蔵大臣・清国・イギリス・英国インド政庁との連携の上に対応した。また、那桐は1906年に調印された「西藏に関する（英清）条約」に基づいて回答している。

このようにチベットに潜入していたヘディンと、このヘディンの保護を求めた光瑞の対

清交渉を、当時の国際社会と対比させながら整理してみると、その相関関係に気づかされる。つまり、大谷探検隊を内陸アジア調査を基軸としてのみ整理するのではなく、内陸アジア調査と前後して展開されたインド調査・東南アジア調査・中国調査、そしてチベット留学を含めて「アジア広域調査活動」という認識を持つことが必要であると白須氏は指摘した。また、大谷探検隊を、20世紀初頭のアジアにおける世界史的行為として当時の「国際政治社会」の中から理解し、外交史料に基づいて大谷探検隊を捉えなおす必要があると白須氏は提起した。

以上、本報告はヘディンや光瑞の活動を当時の国際情勢と相関させて理解することで、彼らのアジア観や国際社会におけるアジアの位置づけを考察するものであった。

【議論の概要】

村岡倫氏は、本報告によって改めて国際政治社会における光瑞像、国際人としての光瑞像を認識させられたということ、加えて、これまで大谷探検隊の隊員は、危険な辺境へ送り込まれたという印象が強かったが、実際は電報が届く電信システムが発達した地域に沿って派遣されており、常に隊員の消息をつかめるよう気を配っていた、光瑞の豊かな人間性を知ることでもできたということを述べた。そして、来年は大谷探検隊終了100周年に当たり、大谷探検隊研究のよりいっそうの深化が望まれるが、それには今後、今まで以上に龍谷大学が研究を牽引していくべきであることを強調し、コメントを締めくくった。

フロアからは、大谷光瑞が西太后に謁見した際のことを、『清実録』では「伯爵大谷光瑞」と記しているが、清側は光瑞のことを日本政府の外交使節の交渉と捉えていたのか、一個人の交渉として捉えていたのかという質問がなされた。

白須氏は、大谷光瑞は爵位を持ち、更に本願寺の二十二世門主であったというステータスを遺憾なく発揮した人であると述べた。また外交術に長けた人であり、北京にも当時の皇太子妃の姉である自身の夫人を同伴している。「伯爵大谷光瑞」と記されている点に関しては、当時の外交儀礼における有爵者の待遇などを検討する必要がある、時代の常識を掴みながら考えていく必要があると白須氏は答えた。



2013年度 第6回 ユニット3（東アジア地域班）研究会

■報告題目：躍動する韓国仏教—在家布教師、仏教ホスピス、妻帯僧教団など—

- 開催日時：2014年1月9日（木）10:45～12:15
- 場所：龍谷大学大宮学舎東翼 203 教室
- 報告者：藤 能成（龍谷大学文学部教授）
- コメンテーター：原田哲了（龍谷大学非常勤講師）
- 参加者：59 人

【報告のポイント】

本報告は、2013年8月21日～30日に実施された、藤能成氏による韓国仏教の現状に関する現地調査報告である。藤氏は、特に仏教ホスピス、曹溪宗布教師団、曹溪宗国際布教師会、太古宗などの活動に関する聞き取り調査によって得られた成果から、現在の韓国仏教界が抱える課題について指摘した。

【報告の概要】

報告の導入として、藤氏は写真を提示しながら本調査の訪問先について説明を行った。その中で、桧巖寺址、興国寺、守国寺、津寛寺、奉恩寺など、朝鮮王朝と関係の深い寺院についても紹介した。

開院して間もない浄土マウル自在病院は、理事長である能行師一人の発願と使命感によって建設された韓国唯一の仏教ホスピスである。朝鮮戦争後、仏教界は戦争によって荒廃した寺院・文化遺産の復元に力を注ぎ、社会的な奉仕活動を重視したキリスト教（カトリック、プロテスタント）に遅れを取った。韓国仏教は常にキリスト教と並存しており、様々な問題に迅速に対応する必要がある。能行師へのインタビューを通して、韓国の仏教界、福祉、キリスト教などの近年の動きを垣間見ることができたと藤氏は述べた。

次に、曹溪宗布教師団は、在家信徒として奉仕活動を行う布教師の組織である。しっかりした人材養成課程を基礎に、非常に充実した組織と広範囲に亘る活発な活動を行っている。通常、僧侶は布教師が活発に活動することを嫌うため、「僧侶の邪魔をしない範囲で」教団の僧侶の仕事を援助する役割を担う。関係者へのインタビューを通して、布教師達は仏教徒としての誇り、社会的使命感を持って、奉仕活動を行っている印象を受けたと藤氏は述べた。

曹溪宗国際布教師会もまた、在家信徒の奉仕者の集団である。外国人のために活動する団体が存在することから、韓国仏教の視野の広さ、また進んで社会に奉仕する韓国人の国民性を見ることができる。

また、妻帯僧教団である太古宗関係者からの聞き取りを通して、韓国仏教界全体が抱える問題を垣間見ることができると藤氏は述べた。現在、韓国仏教は儀式化しており、易学や先祖供養を行わなくては寺院を維持できなくなっているとの見方もあり、キリスト教から批判を受ける素地がある。また、妻帯僧に対して寛容でない韓国社会の伝統的な価値観が、太古宗の発展を阻んでいる。このような妻帯僧が生まれた背景には、日本の植民地政策や日本仏教の韓国進出が深く係わっていることを忘れてはならないと藤氏は指摘した。

最後に藤氏は、これまでの調査では韓国仏教の評価すべき面を見てきたが、今回の調査

では韓国仏教の抱える問題性を多く知ることができたと述べた。キリスト教と競合する社会において、韓国仏教界は様々な問題に対して常に現実的・具体的な対応を求められており、それに迅速に対応しようとする姿勢を見ることができる。日本の仏教信仰形態と韓国の仏教信仰形態は異なりはするが、韓国仏教界、韓国人の宗教性、信仰心、精神、活動に日本仏教界が学ぶべき点があると藤氏は指摘した。

【議論の概要】

原田哲了氏は、韓国仏教の歴史を概観してみると、朝鮮時代に仏教が弾圧され、仏教勢力が弱まった段階からいきなり近代化が始まっていくという特殊性があり、そのため韓国仏教は近代化に即した行動を取りやすかったと考えられる、と述べた。一方、日本仏教は江戸時代に徳川幕府の政治的影響を受けながら学問的發展を遂げ、それを基盤として近代化が始まった。日本においては江戸時代の伝統文化が、近代化を縛った部分があったのではないかと原田氏は指摘した。更に原田氏は、在家布教師団は寺院側の働きかけによって形成されたのか、それとも信徒側からの自発的な動きが大きかったのか、と質問した。

藤氏は、在家布教師団の形成に関しては関係者から聞き取りを行うことはできなかったが、僧侶からの働きかけだけではこれほど規模が大きくなるはならなかったと思うと答えた。韓国の人々は信仰に対するはっきりした自覚と誇りを持ち、社会の人々に対する奉仕を喜びとするという国民性があり、更には社会全体が宗教の重要性を認識している。このような点が、布教師団形成の背景にあると藤氏は述べた。

佐藤智水氏は、在家布教師団に関しては、在家の人々の間で問題が発生して運営がうまくいかない場合があることが想定されるが、そのときには、どのような方法で解決がはかられているかという質問を行った。藤氏は、近年、曹溪宗などは宗門校・仏教大学を創立しており、教養の高い人々が仏教に帰依している点は、問題解決の糸口と考えられると答えた。また、在家布教師団の団長は、布教師団の活動の中で問題が発生することもあるが、恨みを抱くのではなく、仏縁を喜び、あるいは利他の行いに専念していこう、と導いていると語っている。こうした点に、運営上の問題を解決するヒントがあるのだろうと藤氏は述べた。



2013年度 第7回 ユニット3（東アジア地域班）研究会

■報告題目：中国河北省・山東省に残る仏教造像銘の調査

■開催日時：2014年1月18日（土）14:00～16:00

- 場所 : 龍谷大学大宮学舎白亜館 2 階共同研究室 1
- 報告者 : 桐原孝見 (龍谷大学大学院)
- ファシリテーター : 市川良文 (龍谷大学文学部准教授)
- コメンテーター : 佐藤智水 (龍谷大学客員教授, BARC ユニット 3 リーダー)
- 参加者 : 8 人

【報告のポイント】

本報告は、2013 年 8 月 1 日～10 日に桐原氏が同行した、佐藤智水氏・市川良文氏・倉本尚徳氏らの行った中国河北省・山東省に残る仏教造像銘の实地調査に関する報告である。

桐原氏は、特に、佐藤氏らが過去に調査を行い、今回も調査を行った山東省の博興県博物館に所蔵される造像銘の移録成果などから、南北朝期における博興県周辺の仏教について論じた。

【報告の概要】

導入として桐原氏は、自身が同行した佐藤氏らによる中国河北省・山東省に残る仏教造像銘の調査について、写真や移録成果を提示しながら行程の説明を行った。その後、山東省の博興県博物館に所蔵される造像銘などをもとに報告を行った。

調査の結果、供養者の本貫地として楽陵郡という地名が多く見られることを指摘した。楽陵郡については、『魏書』地形志によると滄州と青州の 2 州が存在する。所蔵される造像銘には、青州と記されるものが複数あるため、本貫地に郡しか述べていないものも青州の可能性が高いとした。

つづいて、滄州および青州の治所と、青州楽陵郡は現在の何処にあたるかを述べた。

滄州と青州の治所については、それぞれ当時の饒安城および東陽城に置かれており、現在の河北省塩山県と山東省青州市にあたる。

青州楽陵郡については、『魏書』地形志に陽信・楽陵・厭次・新楽・湿沃の 5 県があったことがわかる。陽信および楽陵の 2 県については、千乗城・博昌城・薄姑城という城名がみえることから、現在地を推測することが出来る。千乗城は現在の山東省鄒平県、博昌城は現在の山東省博興県、薄姑城は山東省博興県にあたる。また、厭次・新楽・湿沃の 3 県の位置についても、それぞれ現在の山東省惠民県・山東省寧津県・山東省商河県にあたるとした。そのため、青州楽陵郡は先に挙げた現在の県を包括する位置に存在していたと述べた。

また、正史をもとに南北朝期の青州および楽陵郡に関する記述、僧伝をもとに青州の仏教に関する記述について検討した。楽陵郡については、治所が近いため青州全体の動きに左右されたと考えられるとした。また、青州全体の動きに目を転じてみると、皇興 3 年(469)に献文帝が青州の民を京師に移して以来、断続的に反乱がおきる場所であったと述べた。

青州における仏教については、古くは竺僧朗にたどられ、彼は評判をきいてやってくる者

たちに泰山で教育を行っている。その内容については不明であるが、その数は百人余りであったことをふまえると、当時彼の元から巣立った僧たちが、青州各地で仏教を伝えていたことも想像できると述べた。その後、僧鍾・僧意・慧蔵といった僧たちが青州にいたという。このことから、青州における仏教は、古くは前秦の時代からみえ、そこへ住した僧たちが、積極的に後進の育成を行っていたのではないかと指摘した。

調査した造像銘からは、楽陵郡という地名が多く見られるほかに、女性が多く造像に関係していたということ、武定五年（547）当時、楽陵郡城の東南兩里に郷義寺という寺があったということ、北斉の年号が記されるものに、盧舎那像に関するものが見られることから、当時この地域では盧舎那仏造像の流行があったのかもしれないということを指摘した。

最後に桐原氏は、今回用いた造像銘は龍華寺遺址出土のものが多く、南北朝期の博興県における仏教を知るうえで有益であると述べた。さらに、報告では青州および楽陵郡について主に扱ったが、供養者の本貫地については他のものも見えるため、更に検討を加えることで龍華寺がどのような地域の人々に知られていたかわかるのではないかと指摘した。

【議論の概要】

佐藤智水氏は、楽陵郡の境域が現在のどこにあたるのか検討したことは興味深いとした。これに関連して、諸城市および博興県は山東省の仏教文物が突出した地域であると述べた。また、楽陵郡が滄州と青州とに存在することから、僑県における移民と仏教との関わりを考える必要があるとした。造像銘に女性の参加者が多くみえるのは、家族の一員であるということもあるが、その名前を書き入れるという何気ない意識そのものは仏教で培われたものかもしれないとされた。龍華寺については、寺の場所や関係する人々を改めて検討すれば、地域の集団と僧侶との関係などが見えてくるかもしれないとされた。史料として配布したもののなかで、「張道果造弥勒像題記」（大村西崖『支那美術史雕塑篇』（本編）（一九一五年、仏書刊行会図像部）（187~188 頁参照）を用いているが、これに関しては呂義の形成のされ方からして、太和 14 年（490）には置けないだろうという指摘があった。

北村一仁氏からは、楽陵郡における交通路を考えてみれば面白いのではないだろうかというアドバイスがあった。

また、報告者が盧舎那像造像に関しては山東省独自のものなのか、それとも他の地域でも見られるのかという問いを發した。これに対して、倉本尚徳氏からは、他地域にも一部見られるが、殆どは山東省の地域に集中しており、それは何故かということに関しては解明されていないとの回答があった。



2013年度 第8回 ユニット3（東アジア地域班）研究会

- 報告題目：4～6 世紀中国河北地区仏教信仰の発展歷程
- 開催日時：2014 年 1 月 25 日（土）10:30～12:00
- 場所：大宮学舎西翼 2 階大会議室
- 報告者：劉 建華(河北省文物出境鑑定中心研究員)
- ファシリテーター：徐 光輝（龍谷大学国際文化学部教授）
- コメンテーター：佐藤智水（龍谷大学客員教授，BARC ユニット 3 リーダー）
- 参加者：26 人

【報告のポイント】

本報告は、4 世紀から 6 世紀、すなわち十六国期より北朝期に至る、現在の河北省における仏教造像芸術とその源流について、出土文物資料を豊富に用い考察したものである。河北省においては 3 世紀末～4 世紀初めにはすでに仏教が伝わっており、4 世紀になると後趙の石勒・石虎が仏図澄を重用し、それによって当地では仏教が急速に発展した。それと同時に造像も流行し、独自の芸術的風格が形成された。その後、戦乱により一時衰退した時期もあったが、概ね 6 世紀半ばまで河北地区の仏教信仰は衰えず、また仏教造像芸術の面においても、華北の各地区に対し大きな影響を与えた。

【報告の概要】

河北における仏教信仰とその伝播については、中心となる地区が二つあった。中山国の故地（河北省中南部）と鄴城地区（河北省最南部）である。まず中山国であるが、当地は保定・石家荘地区にあたる。概ね 3 世紀末から 4 世紀初にはすでに寺院・僧の存在が確認でき、4 世紀末、後燕の治世には仏教が盛んとなった。5 世紀、北魏の治下に至って当地は仏教造像の中心地となり、北斉から隋唐期にかけて白大理石像が盛んに製作された。一方鄴城地区は、4 世紀前半に後趙が鄴に都を置き、仏図澄を招いてから、仏教文化の中心となった。後趙滅亡後一時は衰退したが、東魏が再び当地に都を置き、北斉の皇族・高氏が仏教を信奉したことにより、仏教は再び大いに栄えることとなった。

仏教芸術の状況に目を転ずるならば、3 世紀末から 4 世紀、すなわち十六国時代にかけて、河北地域における仏像には、ガンダーラ仏教美術の影響が濃厚に表れていた。なかでも、後趙建武四年（338）の銘がある仏像は、仏図澄の教化による影響のもとで生まれた作品である。そしてその影響は、十六国晩期にまで及んだ。

つづく 5 世紀から 6 世紀末にかけての河北における造像芸術は、中山国の故地と鄴城地区を中心として、後趙時代の風格と技法を継承しつつ、また雲岡・龍門石窟造像の流行を取り入れ、独自の作風を形成した。その一方では、雲岡石窟において曇曜が開削した五窟の大仏の服装からは、河北の古中山国の影響を窺うことができる。ほかにも、曲陽におけ

る白大理石製の仏像は6世紀前期より見られ、6世紀半ば以降の仏像には、白大理石が多く使用されるようになる。これは河北における仏教造像独自の特徴である。

また、透かし彫りを用いた仏教造像は、北魏晩期に見られ、北齊において高度に成熟した。透かし彫りを行い彩色するという技法が広く用いられたことによって、白大理石像に鮮烈な生命力が宿ることとなり、人々にさらなる感動を与えた。これもまた河北地区独特の仏教造像工芸である。しかし、このような透かし彫り技法は、北朝期の河北のみに現れたものであり、それより以前・以後ともに見られるものではなく、中国仏教史においてかなり特殊なものであった。

【議論の概要】

最初に、佐藤智水氏は、1953年、河北省曲陽県修徳寺において、多数の白大理石像に混じり出土した砂岩の交脚像について、まずその様式が雲岡様式、あるいはそれに近いものかどうか、さらに、一方で白大理石像には雲岡様式の影響があまり見られないことから、当地には雲岡様式を受け入れないという意識があったのではないかと問い、白大理石像に雲岡様式が入る時期とその具体例について質問した。

それに対し劉建華氏は、まず河北では北魏中期以前には白大理石が石材として利用されておらず、孝文帝太和年間の仏像には白大理石製のものがないと述べた。そして太武帝の廃仏前には、河北には独自の作風があったのではないかと回答した。また砂岩の仏像については、その製作年代は概ね470年代前後ではないかとし、後趙以来の河北特有の作風の影響があるが、雲岡の影響もあるのではないかと、具体例を示しつつ回答した。

以上の回答に対し、佐藤智水氏は、河北省定州周辺では伝統的に、自らの独自性に自信を持っていたのではないかと考えていたとコメントし、さらに河北各地区の白大理石仏像の関係について、以前の劉建華氏の言葉を引き、東魏以降では鄴城の作風が滄州・曲陽のものに影響を与えたのではないかと述べた。

次に石松日奈子氏は、河北地区において、丸彫りの彫刻が見られるのはいつごろからかと質問し、それに対し劉氏は、北齊であると答えた。

続いて宮治昭氏は、まず東京国立博物館所蔵の北魏太平真君4年(443)の金銅仏は、河北出土なのかと質問した。劉氏は、その衣紋の形状より、河北出土ではないかと回答した。さらに宮治氏は、北魏早期のものにあたるこの金銅仏には、ガンダーラの影響が強いと考えたと述べた。佐藤智水氏もまた、この金銅仏には銘文に地名が明記されているものの、銘文と像とがうまく合致しない点があると述べた。両氏のコメントに対



し、劉氏は、その銘文は未見であり、またガンダーラ仏とも比較検討したいと述べた。



2013年度 第1回 ユニット3（東アジア地域班）国際ワークショップ 「仏教石刻と地域社会—中国中古時代における地域史的宗教環境の探究—」

■開催日時：2014年1月26日（日）10:00～18:00

■場所：龍谷大学大宮学舎清和館3階ホール

■報告者・報告題目：

報告1：北村一仁（龍谷大学非常勤講師，BARC 公募研究員）

「北朝国境地域における仏教造像事業と地域社会—山西省陽城県出土，上官氏造像を手掛かりとして—」

報告2：劉 建華（河北省文物出境鑑定中心研究員）

「鄴城地区出土仏教造像芸術特点及其他地区的影響」

報告3：石松日奈子（清泉女子大学非常勤講師）

「中国式如来立像の北朝的展開—雲崗第16窟大仏と地方造像—」

報告4：倉本尚徳（BARC 博士研究員）

「唐代造像銘に見る善導浄土教の影響—龍門石窟を中心に—」

報告5：劉 淑芬（台湾中央研究院歴史語言研究所研究員）

「九世紀的多種陀羅尼石刻」

報告6：佐藤智水（龍谷大学客員教授）

「山東の地域社会と女性主導の造像事業」

■コメンテーター：佐川英治（東京大学准教授），稲本泰生（京都大学准教授），会田大輔（日本学術振興会特別研究員PD，明治大学兼任講師），入澤 崇（龍谷大学教授），中田美絵（関西大学非常勤講師，東西学術研究所非常勤研究員），河上麻由子（奈良女子大学助教）

■参加者：87人

【報告のポイント】

本ワークショップは、ユニット3（東アジア地域班）がこれまで進めてきた中国仏教石刻研究の集大成として位置づけられる。中国・台湾より各1名の著名な研究者を招待し、合計6名の報告者により、国家、地域社会、ジェンダーなど様々な視点から、現地調査等によって得られた仏教石刻の新資料を多く用いた最新の研究成果が発表された。

【報告の概要】

北村一仁氏は、山西省陽城県に現存する北齊「上官氏等合邑造釈迦仏像摩崖」に基づき、北朝国境地域における仏教と民衆・政権の関係について考察した。北村氏は、「上官氏」摩